



新潟大学広報誌

新大広報

Niigata University Campus Magazine

2008年早春号

No.167

特 集

新潟大学を語ろう

～旅立ちの日～

新学長からのメッセージ

前学長からのメッセージ

shindai NEWS

全学講義開講

CAMPUS INFORMATION

第56回 卒業制作展



新潟大学の付加価値と品質を高め、
ブランド力を高めることが私の使命であると思っています。

新学長挨拶

新潟大学長 下條 文武
GEJYO, Fumitake

この度、長谷川彰先生の後を引き継ぎ、新潟大学長の重責を担うことになりました。大変光栄に思うとともに、責任の重さを痛感しております。

21世紀は、新しい知識や情報、そして技術が、社会のあらゆる領域においてその活動基盤としてますます重要性を増している時代といえます。しかし、変わらぬ大学の普遍的使命は、卓越した指導の人材の育成、すなわち「教育」であり、持続的な知的生産となる活動、すなわち「研究」であり、さらに社会的存在としての使命である「社会への貢献」が基本であります。しかしながら、今の時代にあつては、その中身が、従来にも増して幅広くかつ深いものが求められています。

加えて、学術研究の高度化・学習機会の多様化と相まって、18歳人口の減少、急速なグローバル化など、私どもをとりまく環境は、かつてないスピードで変化しています。国家財政からくる運営費交付金が削減されるなかで、本学が持続的な発展を遂げていくには、大学構成員が一体となってあらゆる面で努力していくことが不可欠です。

私に与えられた使命は、新潟大学が培ってきた資産である規模と範囲を効果的に活かして、日本海側で唯一の政令指定都市・新潟市に立地する「大規模総合大学」として、

- ①環日本海地域の教育・研究の拠点大学
- ②世界トップレベルの特色ある研究の推進
- ③地域への眼差しをもった「社会に存在感のある大学」

という新潟大学の付加価値と品質を高め、結果として本学のブランド力を高めることにあると思っています。

新潟大学は、長い歴史と豊かな伝統をもちますが、2004年（平成16年）4月1日から、法人化移行に伴い国立大学法人新潟大学に生まれ変わり、教育基本目標を「精選された教育課程を通じて、豊かな教養と高い専門知識を修得して時代の課題に的確に対応し、広範に活躍する人材育成」と掲げました。そして、本学は、体系的なカリ

キュラムの提供、修学をサポートする新学務情報システム、主専攻プログラムへの転換、副専攻プログラムの充実、また、多様なニーズに対応した初修外国語カリキュラムの導入など、学生の自発的学習意欲を喚起する教育環境を提供し、学生一人一人の個性を伸ばす体制を目指しています。

本学は、日本海側唯一の政令指定都市・新潟市に立地し、五十嵐地区と旭町地区の二つのキャンパスは、ともに佐渡島が浮かぶ日本海と、信濃川が流れる越後平野に囲まれ、近くには自然保護地区に指定されている佐潟や植物の宝庫である角田山があります。このように雄大な自然環境に囲まれた両キャンパスは、学生諸君が落ち着いて勉学に打ち込むにも恵まれた環境です。

本学は、田園都市型の地域に根ざした大学として「地域共生型の環境調和」を環境保全の基本理念としております。そして、環境教育、ボランティア活動、「リユース市」開催をはじめ、キャンパスクリーンデー、環境報告書2006、2007発刊活動など、環境の保全や改善に向けたプログラムを展開中です。学生諸君には、環境問題に意識を高めて頂き、積極的な参加をお願いします。

学生諸君にとっては、今の学生時代が人生の中で最もエネルギーのあふれる大切な時期です。積極的に、クラブ活動や各種行事を通して互いの交流を深め、人生の宝となる「一生の友」を、一人でも多く作ってほしいと思います。また、諸君には、素晴らしい「我が師」となる、多くの先生や先輩との出会いがあると思います。「師は鐘のごとし、大鳴り、小鳴りはその人の撞（つ）く力に由る」です。諸君は、それぞれが「撞（つ）く強い力」を持っているはずです。多くの「我が師」から、将来の夢や希望を叶えるための、大きな手がかりを得ていただきたいと思います。

人生の宝となる

「一生の友」を、一人でも多く作ってほしい。

そして、多くの「我が師」から将来の夢や希望を叶えるための

大きな手がかりを得てください。



いかにして
新しい時代にふさわしい人材育成を行うべきか。
これを新しい大学づくりの中で
最も重要視してきました。

退任の挨拶

新潟大学前学長 **長谷川 彰**
HASEGAWA, Akira

平成20年1月末日をもって任期満了により学長を退任いたしました。退任にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

在任中の最も大きな出来事は、平成16年4月の法人化でありました。厳しい意識改革を迫られる変革でしたが、むしろ、法人化を、従来から営々と築き上げられてきた教育研究実績の上に、環日本海地域においてより大きな存在感をもつ個性輝く大学づくりを行う好機ととらえ、真摯に取り組んでまいりました。皆様のご理解とご協力に感謝しつつ、主な取組を振り返ってみたいと思います。

新しい大学づくりの中で最も重要視してきたのは、いかにして新しい時代にふさわしい人材育成を行うべきかという課題でした。全学教育機構が主導して、総合大学の教育資源を最大限に活かし、分野・水準表示法や副専攻制度を含む新しい学士課程教育システムの構築を進めてきましたが、その根幹は各学部における主専攻プログラムの確立であり、今後とも継続した取組が必要です。この取組が、やがて全国の総合大学の教育モデルとなることを期待しています。

本学では様々な分野で独創的な研究が推進されており、画期的な成果も得られています。21世紀COEプログラムにも選定された脳研究所のさらなる充実をはかるとともに、超域研究機構が牽引役となって他の優れた研究をも支援し、また、研究成果を学内外に向けて発信してきました。近い将来、脳研究所に続く第二、第三の世界的研究拠点が誕生することを期待していますが、それには研究者自身の情熱と努力が不可欠であることは言うまでもありません。

社会展開においては、新潟市等と包括連携協定を締結し、教育、医療、産業等、様々な分野で共同事業を実施し、また、災害復興科学センターは県と連携して中越地震や中越沖地震等による災害復興を支援してきました。知財活動では、知的財産本部を設置して、基本特許などの知的財産の創出、管理、活用に努めてきましたが、長年にわたる基礎科学に関する教育研究の成果が、グローバルな価値を秘めた画期的

な技術開発にむすびついた発明もあり、大学らしい成果が徐々に現れてきました。また、企業との共催による社会連携フォーラムには、地域の方々も多数参加され、地域と大学の共生について教職員や学生とともに率直な意見交換が行われるようになりました。国際展開では、環日本海地域の協定大学と学位授与について協議を進め、学生交流にも新たな道が開かれつつあります。

多くの事業が軌道にのり、次第に成果も得られつつありますが、どの事業においても流動定員や特任教員制度が有効に活かされており、これらの制度により採用された教員が本学に新風を吹き込んでいます。また、これらの事業を側面支援するために、旭町・五十嵐両キャンパスに対して綿密な年次計画のもとで耐震改修を進めてきました。さらに、老朽化設備の更新においても概算要求のマスタープラン枠の中で一定の成果を得ることができました。施設や設備の充実に向けては、今後とも、中長期的な計画を立て、しっかりと取り組んでいただきたいと思います。

経営面で大きな部分をしめる医歯学総合病院は、再開発計画や経営努力が実を結び、平成18年度病床稼働率において国立大学法人附属病院中第一位を達成しましたが、大学病院をとりまく状況は厳しく、今後とも経営努力を継続していただきたいと思います。

教育研究組織の整備については、法人化を機に、法科大学院の設置をはじめとして、新しい学科や研究科の設置が継続して行われてきており、本学は一層均整のとれた大規模総合大学として発展しつつあります。

本学の中期目標・中期計画の達成に向けた取組に対する客観的な評価については、国立大学法人評価委員会による各年度に係る業務の実績に関する評価において、これまで総じて高い評価を得ることができました。これもひとえに、教職員一体となって取り組んでいただいた成果であり、あらためて皆様のご理解とご協力に心より御礼申し上げます。とりわけ、法人移行作業及び法人化にともなう大学改革において、総力上げてご支援いただいた事務局に心より御礼申し上げます。

最後に、次期学長のもとで、さらに新潟大学の存在感がより大きなものとなり、個性が一層輝きを増していくよう祈念して、退任の挨拶といたします。

さらに新潟大学の存在感がより大きなものとなり、個性が一層輝きを増していくよう祈念します。

新潟大学を語ろう

～旅立ちの日～

卒業・修了する学生からのメッセージ

人文学部 地域文化課程

町田 由布子

教育人間科学部 学校教育課程

藤井 信一郎

法学部 法学科

山崎 勇辰

経済学部 経済学科

津幡 望

理学部 数学科

綿田 晃夫

医学部 医学科

比嘉 研

医学部 保健学科

鈴木 顕子

歯学部 口腔生命福祉学科

丸山 美嶺

工学部 化学システム工学科

梁 暁芸

農学部 生産環境科学科

本間 哲郎

大学院 教育学研究科 教科教育専攻

小野 美幸

大学院 教育学研究科 教科教育専攻

竹内 喜紀

大学院 保健学研究科 保健学専攻

船久保 夏菜

大学院 現代社会文化研究科 地域社会形成論専攻

楊 夫高

大学院 自然科学研究科 材料生産システム専攻

曾根 浩司

大学院 医歯学総合研究科 地域疾病制御医学専攻

高野 智洋

卒業生・修了生からメッセージを集めました。

新潟大学を旅立つにあたり、

いろいろなことがありました。

入学してから、学業、スポーツ、交友、

ボランティア活動、アルバイトなど、

● 人文学部 地域文化課程

MACHIDA, Yuko

大学生活を振り返って

町田 由布子

大学生活の4年間は本当にあっという間だった。そう感じるのはいはり大学生活が自分の中で楽しいものであった証拠であると思う。これだけ自由に自分らしく生きられる時間はおそらくもうないだろう。思い起こしてみれば、大学入学当時は今までと全く違う土地での生活への不安がとても大きかったが、時間がたつにつれて様々な人と出会い、様々な話をし、感情を共有していくことによって、不安は大学生活を心底楽しむ感情へと変わっていった。もちろん楽しいことばかりではなく、それなりに辛いことはあったが、今になって考えればそれらのこともあってこそ大学生活だったと思う。特に大学生活の中で大きい比率を占めていたオリエンテーリング部で過ごした時間は貴重なものであった。そこでかけがえのない仲間と出会い、共有した思い出を決して忘れず、次のステップへと向かっていきたい。



オリエンテーリング部の仲間と 奥が本人

● 教育人間科学部 学校教育課程

FIJII, Shinichiro

卒業、そして新たなステップへ

藤井 信一郎

入学してから、かれこれ4年がもう過ぎようとしている。小中高校の友達とは離れてしまい、まったくの無の状態からスタートした大学生活。不安は色々あったが、やり通したことが1つある。それは、学業だろうが人間関係だろうが、まず夢に向かうということ。夢は夢だと思っている限り、正夢にはならない。行動を起こさなければならない、と思い起こした結果、アメリカへの留学、日本・アメリカの大学院に合格、と大学生活における目標は達成された。もちろん学業の面だけではなく、部活動やその他の面でも、目標は達成でき、大学生活はとても充実していた。

1つ気づいたことがある。大学生という立場は、働く社会人としてと勉強する高校生との間をつなぐ大きな橋のような役割を担っている、ということ。この大切な時期の経験はとても貴重だった。新潟を離れるのは寂しいが、この新潟での貴重な経験を基に、新たな場で頑張っていきたい。



ホームステイ先にてホストファミリーと 本人は左から3人目

● 法学部 法学科

YAMAZAKI, Yushin

新潟大学を卒業するにあたって

山崎 勇辰

月日が流れるのは早いもので、もうすぐ卒業だ。思い返してみれば、大学生活の4年間を通して様々な経験をした。そのなかでも、思い出されるのは4年間過ごした下宿での生活と3年から所属したゼミでの活動である。下宿では違う大学や専門学校の生徒も入居していたため、自分とは異なる分野を専攻する人たちの話を聞くことができ、とても有意義な時間を送ることができた。また所属したゼミでは学会やワークショップに参加させていただき、教科書に載っている事件の当事者の方やさまざまな職種の方々と話す機会を持つことができた。こうした経験は就職活動において活かすことができたし、またこれからの社会人としての生活の中においても、きっと生きてくるものであると思う。

この4年間の多くの出会いや、経験は自分を成長させてくれたと思う。両親をはじめ、友人や先生方などお世話になったすべての人に感謝したい。



本人は左から4人目

● 理学部 数学科

WATADA, Akio

4年間を振り返って

綿田 晃夫

新潟大学で過ごしたこの4年間はとても充実したものでした。最高の仲間、すばらしい先生方、最高の環境がすべてそろっていました。

大学全体では改修工事がなされ、勉強をするための環境がより良くなりました。先生方については、勉強においてわからないことがあった時はいつでも質問ができる環境があり質問を受けてくれました。勉強の仕方などのアドバイスもしてくれましたし、悩んでいることがあればその相談も親身になって聞いてくれました。

そして、なんと言っても最高の仲間と勉強できたことがとても良かったです。友達とひとつの問題に対して議論をしたりしました。時には考え方の違いから白熱することもありましたが、とても貴重な時間をすごせました。ここで出会った仲間は一生の仲間になると思います。

このような貴重な経験ができたのは最高の仲間に出会えたからだと思います。この新潟大学での4年間は本当にすばらしい4年間でした。



本人は左から2番目

● 経済学部 経済学科

TSUBATA, Nozomi

出会いに感謝

津幡 望

この四年間の大学生活を振り返ってみると、本当に多くの人たちとの出会いがあった。私が大学生活を無事に楽しく過ごすことができたのは、一生付き合っていけるような、そんなかけがえのない友人との出会いがあったからこそだと思える。

特に、ラクロス部の仲間は特別だった。先輩や後輩、そして同学年の仲間と一つの目標に向かって、汗を流し、涙を流し、そして沢山笑って頑張ってきた。部活を続けてきて本当によかった。

近頃、一人暮らしを始めた頃の自分が懐かしい。あれからもう四年も経つのかと考えるとすごく早い気がするが、今の友人達とまだ出会ってなかったことを思うと、時の重みをすごく感じる。

様々な出会いこそが、自分を成長させてくれたと思う。私に関わってくれたすべての方にお礼を申し上げたい。



本人は中央

● 医学部 医学科

HIGA, Ken

卒業するにあたって

比嘉 研

理想に燃え、再受験をして医学部に入学したが、卒業へ漕ぎ着けるまでに実に11年かかってしまった。ある時何かがズレ始め、そこで立ち止まってしまった。自分では歩いているつもりだったが、そこは広い広い踊り場で、次の階段がどこにあるのか見当もつかなかった。理想ばかりで地に足が付かず、現実との距離を測れなかった。

できることなら取り戻したい時間ではあるが、自分にはそれだけの時間が必要だったのだと思い込むことにする。踊り場を歩き続けたことで、理想を現実には当てはめるのではなく、具体的な目標を胸に、目の前にある現実に対処していける体力と知恵を身につけ、気を練ることができたのだと。

有形無形の援助をしてくれ、長い目で見守ってくれた方々、特に両親には感謝しています。恩返しできるとすれば、それは医師としての人生を全うすることしかない。そのことを忘れず、人生で最も長い時間を過ごしたこの新潟の地を旅立とう。



ドラムを叩いているのが本人

● 医学部 保健学科

SUZUKI, Akiko

卒業するにあたって

鈴木 顕子

臨床検査技師になるという目標を持って入学してからはや4年。入学当初は全く医療の知識などなかった私が、この4年間でどれだけ成長したのか成果を発揮する国家試験が卒業前にあります。資格を取得するために実習、講義にと一生懸命取り組んできたのですが、それ以外にも大学生活ではたくさんのものを得ることができました。その中の1つが友人との出会いです。

検査学科は40人のクラス制なのでクラス全体が仲良く、真面目な話だけでなく、冗談を言い合える友人達と出会うことができました。また、サークルでは様々な学部の人達と接し、視野を広げることが出来ました。このクラス、友人達だったからこそ、私にとって大学生活が楽しい思い出になったのだと思います。

これから医療従事者になると思うと不安はありますが、大学生活で培ったことを生かして頑張りたいと思います。そして、大学で出会った友人達との繋がりをこれからも大事にしていきたいです。



瀬波修学旅行での遊覧船のりばにて 本人は中央

● 歯学部 口腔生命福祉学科

MARUYAMA, Mirei

卒業にあたって

丸山 美嶺

長い、4年間だった。2年次、すでに履修申請とは縁のない存在となり、歯科の知識を頭に詰め込んだ。3年次、歯科の知識で染まった頭に、さらに福祉の知識を叩き込む。手から砂がこぼれ落ちるように、歯科の知識が頭から抜けていくのが手に取るようにわかった。4年次、ただひたすらに診療室と自宅との往復を繰り返した。季節の移り変わりと共に、福祉の知識が頭の中から薄れていくのを感じた。

私たちは、「学部どこ？」と聞かれるのが嫌いだった。なぜなら、かなりの確率で「すご〜い!じゃあ歯医者さんになるんだね」という反応が返ってきたからである。そう、私たちの存在はあまり知られていなかった。自分たちの存在を疑問に思うことも多々あった。しかし、そんな日々から今解放される。そして、私たちの価値はこれから決まるのである。歯科衛生士・社会福祉士というダブルライセンスの私たちが、いかに役に立つか、温かい目で見守っていただきたい。



本人は中段中央

● 工学部 化学システム工学科

LIANG, Xiaoyun

感謝の日々

梁 曉芸

「一度きりの大学生活だから私にしか出来ないものに」と、日本に留学に来ました。新潟大学工学部で過ごした日々は、本当に私を大きく成長させてくれました。言い尽くせないほど沢山のことを学び、他では決して出来ない様々な経験をし、そして何よりかけがえのない先生達と友人達と出会う事が出来ました。やっと日本語が少しずつ慣れるようになった時、難しい授業のテストを受かった時、初めて日本人の友達が出来た時、大親友と同じ研究室に入った時の喜びは、今もはっきり覚えています。

留学生活で最も印象的なことは、研究室にいた1年間でした。本当に休む間もなくハードな研究生活でしたが、沢山の失敗の後に目的を達成した時の喜びは格別でした。今はやっと「夢を実現するための実力をつける訓練期」と、先生がいつも言ってくれたことを実感しました。この4年間は人に恵まれた学生生活でした。先生、先輩、友人の方々、お世話になった皆様に感謝しています。



本人は前列左端

● 農学部 生産環境科学科

HONMA, Tetsuro

4年

本間 哲郎

今思うと4年間の大学生活はとてもはやく、充実していた。特に4年生の1年間は全力疾走で駆け抜けて来てしまったような気さえする。就職活動、研究、部活とどれも妥協できないものばかりで毎日が忙しかった。日々の生活の中でいろいろなことを考えさせられ、成長できた1年であったと思う。その中でもラグビー部での思い出は特別だ。大学生活の中でここまで熱くなれる場があるとは思っていなかった。全員で1つの目標に向かって本気で意見をぶつけ合った。暑い日も雪の日もグラウンドで練習した。嬉し涙も悔し涙も流した。4年生の代表決定戦で勝ったときは本当に嬉しかった。間違いなく一生忘れないであろうと思う瞬間があった。部活の同期にはとても感謝している。友達、先輩、後輩、先生方、両親、…すべての人のおかげで今の自分がある。新潟大学で過ごした4年間と関わってきてくれた方々への感謝の気持ちを忘れずに生きて行きたいと思う。



試合後、4年生で 本人は後列左から2人目

● 大学院 教育学研究科 教科教育専攻

ONO, Miyuki

大学を修了するにあたって

小野 美幸

私は大学生とは、興味のあることに燃える学生だと考えていました。今振り返ってみると、これを少なからず達成できたと思います。色々な講義をとって、新しい知識を増やし、サークル活動で様々な国の人と出会ったり、充実した学生生活をおくっていました。

「興味のあることに燃える」、その最たるは、やはり研究活動でした。自然環境について学びたいと選択した陸水生態学の研究室で、水生昆虫の研究をしてきました。野外調査や学会発表など、やってみたいことを次々と経験してきました。それはただ楽しい・面白いことだけではありませんでした。もっとやれること、すべきことがあったのに、自分の弱さに勝てず、思うように作業が進められず、達成できなかったという反省もあります。これからは、同じような反省のないよう計画性をもって進んでいきたいと思います。

そしてこんな私に付き合い、見守り、助言をくれたみなさん、ありがとうございました。



胎内ナグシネ 本人は中央

● 大学院 保健学研究科 保健学専攻

FUNAKUBO, Kana

修了するにあたって

船久保 夏菜

「本当にあっという間の2年間だった」というのが今、一番思うことです。講義や実習に追われていた学部生の時とは異なり、自分で実験計画を立て実行していく日々は、失敗も多く時には落ち込むこともありましたが、その苦労の何倍もの楽しさや達成感を知ることができ、気がつけばあっという間に修了の日を迎えてしまいました。

この2年間で充実したもののできたのは、何といっても仲間の存在だと思います。同期は勿論、先輩方の姿を見て良い刺激を受けることも多々ありました。時には研究を離れ、お酒を飲みながら過ごした時間も、忘れられない思い出です。

このような思い出が詰まった場所を離れるのは寂しいですが、また新しい人間関係を広げ、今まで以上に充実した日々を送れるように努力していきたいと思います。

最後になりましたが、長期に渡り御指導下さいました先生方に御礼申し上げます。本当に有難うございました。



● 大学院 教育学研究科 教科教育専攻

TAKEUCHI, Yoshinori

修了するにあたって

竹内 喜紀

私は、他大学の工学部を経て、本大学の教育学研究科（数学教育専修）に入学しました。工学部在籍中より、教職課程を受講し、将来は教職に就きたい気持ちが強くなり、本研究科で教科教育を中心に学び、考えを深めていきたいと思ったからです。研究科の方針と指導教授の勧めもあり、大学院1年次には付属中学校、2年次には新潟市立白新中学校へ1年間、定期的に通い、現在の新潟県の実情、現場の先生の教育実践や生徒との触れ合いをとおして、教師という仕事について教育実践を中心に考えを深めることができました。

白新中学校の研究発表会にて学習支援ボランティアとして参加したときの写真が、私の思い出の一枚です。個別支援という形で生徒と向き合い、『教える喜び』を感じ得ることができました。大学院を修了するにあたり、こうした体験をとおして学び得たことは、私にとっての一生の宝物です。



白新中学校の研究発表会

● 大学院 現代社会文化研究科 地域社会形成論専攻

YANG, FuGao

新たなスタートライン

楊 夫高

『平家物語』の世界に好奇心を持ち、五年半前、私は胸をふくらませて中国から新潟大学に留学してきた。今でも初めて大学のキャンパスを歩いた時の、半分憧憬、半分不安の気持ちを鮮明に覚えている。

外国人である私にとっては、日本古典文学へのチャレンジは決して容易なことではなかった。研究の基礎となる古語、古文の勉強は勿論、『平家物語』をいかに読むべきかという根本的な課題に取り組み、さらに自ら問題提起して裏付けするという研究の基本的姿勢を身に付けるために、必死に努めてきた。このような姿勢は、修了後、どんな環境に置かれても、持ち続けて行きたいと思う。

この間、紆余曲折があった。しかし今は、念願の修了を迎えることを素直に喜びと同時に、先生、家族、周囲の皆様方に深く感謝したい。

新潟大学で、私は自分の夢を見つけ、新たな勇気を頂いた。これから、新たなスタートラインに立つ私は、中国で日本の古典文学の魅力を広げていきたい。



研究室にて

修了するにあたって

曽根 浩司

私が新潟大学に入学してからもう9年の月日が経とうとしている。振り返れば、入学する前までは「将来、自分が何をしたいか?」という問いに対する具体的な答えをもっていなかった。大学で化学をもっと勉強したいという思いはあったが、自分が本当にやりたいことが大学で見つかるのだろうかという不安もあった。

大きな転機となったのは、4年生になり研究室に配属され指導教員である八木先生の指導の下、卒業研究に取り組むことになったことであった。先生には時には厳しく、時には優しく研究の指導をして頂いた。そこで「研究とは何ぞや」を教えて頂き、研究に対する興味が深まっていった。そして、研究室での経験を通して「研究」という「自分がやりたいこと」を見つけることができた。これは、これからの人生において大きな財産であると思う。最後に、この場を借りて家族、友人、先生方、先輩方、これまでお世話になった全ての方々に心から感謝申し上げたい。



研究室のメンバーと 本人は後列右から2人目

新潟大を修了するにあたり

高野 智洋

博士課程は本来4年間のコースであるが、1年間短縮して、私はこの3月に3年次で修了予定である。振り返ると大学院生活はチャレンジの連続であって、毎日が瞬間に過ぎていった。国内外の学会での発表では、普段論文で名前しかみることができなかった先生に実際に会って話せて感動を覚えたことがあった。冷や汗をかいたような気もする。研究は日々の積み重ねであるが、方向性と到達点を定めることが困難で、立ち止まることも間々あった。論文を作り上げるという重圧は大きく、採択された時は本当にうれしかったが、やっとこれで解放されたという気持ちが大きかった。この3年間はまさに自分との戦いであった。修了できるのは、これも偏に教授を始め、教室のスタッフの指導と協力があったからである。感謝の気持ちで一杯である。

大学院博士課程で学んだ多くを今後に活かし、自らを着実に成長させる糧にしていきたいと思う。新潟大学で学べたことに感謝致します。



研究室のメンバーと 本人は後列右から4人目

特集

新潟大学を語ろう ～旅立ちの日～

退任する教員からのメッセージ

理事(教育担当)・副学長
河野 正司

理事(研究担当)・副学長
板東 武彦

人文社会・教育科学系
(教育人間科学部)教授
小林 昭三

自然科学系(理学部)教授
金子 恒雄

自然科学系(理学部)教授
小林 迪助

自然科学系(理学部)教授
渡辺 勇一

自然科学系(理学部)教授
山岸 宏光

医歯学系(医学部)教授
石原 清

自然科学系(工学部)教授
丸山 武男

自然科学系(工学部)教授
田口 洋治

自然科学系(工学部)教授
大熊 孝

自然科学系(工学部)教授
小林 敏志

自然科学系(農学部)教授
荒谷 明日兒

自然科学系(農学部)教授
池田 武

人文社会・教育科学系
(大学院現代社会文化研究科)教授
小林 昌二

人文社会・教育科学系
(大学院現代社会文化研究科)教授
井上 正志

自然科学系
(大学院技術経営研究科)教授
柁田 正美

災害復興科学センター教授
青山 清道

理事（教育担当）・副学長



河野 正司 KOHNO, Shoji

五十嵐を退職するにあたり

二年前に歯学部（医歯学総合研究科）を定年後にも、本年1月31日まで理事（教育担当）・副学長として勤めさせていただき、新潟大学における15年間の生活を終えることができました、感無量です。旭町における教育・研究・臨床に加えて、5年におよぶ五十嵐の大学本部における仕事が与えられましたことは、私の「青春の終焉」を今日まで延ばすことが出来てきたのみでなく、非常に得難い種々の貴重な経験をさせていただきました。

全国に広く認知されてきた新潟大学の教育改革において、その中核をなしている全学教育機構の発足と活動に携わり、新潟大学の教育ブランドの確立にいささかの貢献が出来たのであれば幸いです。

国立大学が法人化した現在、学ぶ者にとって魅力がない大学は、教育と研究面の衰退を意味しているだけでなく、大学としての経営基盤を失っていく道を歩んでいくことになりましょう。この意味からも教員は、入学志願者で列が絶えることのない魅力ある教育・研究成果を造り、入試、教育を担当する学務系事務組織と共同して大きな働きをして下さることによって、大学の未来が開かれていくと思っています。

多くの方々に戴きましたお支えに心から感謝申し上げますとともに、新潟大学のさらなる活躍を祈念申し上げます。



学長、全学教育機構長等による「全学教育機構」看板上掲式

理事（研究担当）・副学長



板東 武彦 BANDO, Takehiko

新潟大学を退任するにあたって

長年お世話になりましたが、1月末で退任します。多くの方々にご支援を賜りありがとうございました。皆様のご協力のおかげで、大学法人新潟大学が真の大学として活動できる基礎を築けたと考えています。私は研究担当ですが、大学評価、国際交流、知財・産学連携、情報処理など副学長・センター長の方々が担当されたものを役員会で代表しました。これらの活動を通じ、大学経営という新しい世界を垣間見たことは貴重な経験でした。

個々の研究は、先生方が独自に進めるものですが、拠点性の高い研究や異分野が融合する学際研究は大学が組織とし

てお手伝いする必要があります。その1つが超域研究機構ですが、おかげさまで20名の優秀な新進の研究者を採用できました。各プロジェクトは短時間のうちに業績を上げています。人員配置はまだ不十分ですが、皆様のご協力に感謝し、今後のさらなる発展を祈ります。プロジェクト推進経費・戦略的教育研究経費もおおむね効果的な配分ができたと考えています。

これから別の人生を送りますが、大学のお役に立てることがあれば、お声をお掛けください。微力ながらOBとして協力させていただきたいと思います。

人文社会・教育科学系(教育人間科学部)教授



小林 昭三 KOBAYASHI, Akizo

新潟大学を
退任するにあたって

1973年の4月に教育学部の長岡分校に赴任してから35年になる。3月に赴任打ち合わせのため初めて長岡に来て、前任者から物理教育の一切を引き継ぎ(教養・専門・実験)、新潟本校4年の演習、理学部(五十嵐)の院生ゼミ、などを引き受けた頃の幾つかの出会いが鮮やかに想起される。赴任時には長岡市に工学部と教育学部長岡分校とがあり大学らしさをなんとか維持していた。当初から地域・学部・大学を超えた協力によって、地方の大学における厳しい環境でもなんとか展望が持てた。

1981年には悲願とされた五十嵐地区への統合移転が実現し、総合大学における教育と研究の基盤が整った段階にやっと到った。今日までの35年を振り返って、特に先見性を欠いた



06 ASPEN高松WORKSHOP

想いがしてならないのは教養教育システム崩壊の歩みだろう。各学部の犠牲において創られた教養組織は国の教養解体政策により94年に崩壊させられたが、昨今では学力低下に対応する教養的教育が囑望される皮肉な状況になった(大学法人化前後の絶え間ない組織改編では10年先の先見性は夢幻とされた)。されど新潟大学は捨てたものじゃなかった。さすが新潟大学だと言わせるような好い思いを最後にはなんとか味わうことができた。今後における新潟大学の確かな発展を祈念して、謝辞に代えたい。

自然科学系(理学部)教授



金子 恒雄 KANEKO, Tsuneo

新潟大学における一風景

1969年大学紛争真っ只中の西大畑キャンパスに、新潟大学理学部助手として赴任した。しかし、新潟大学との関わりは8年前にさかのぼる。つまり1961年新潟大学理学部物理学科の学生として入学した。学部生時代の最大の出来事は、1964年の新潟地震である。

1965年卒業の年に、新潟大学理学部に大学院理学研究科(修士課程)が設置され、そこに1期生として入学し、研究者の卵としての第一歩をふみだした。1967年から1969年の2年間を東京大学大学院(博士課程、2年中途退学)で過ごした後、再び新潟大学に戻ったことになる。

1969年、下っ端教員であったが、多くの時間が大学紛争対



理学部旧校舎

策の為の会議に費やされた。幸いそれも収まり、翌年理学部は五十嵐キャンパスに移転した。移転当時のキャンパスは五十嵐砂漠と称されたように、風が吹くと砂塵が舞うような状態であったが、それも植樹された木々が育ち、数年後には落ち着き、研究するに相応しい環境になってきた。1995年、理・工・農による自然科学研究科がスタートした。

定年を迎えるにあたり、これまで私を育ててくれた新潟大学に深く感謝するとともに、新潟大学が一層発展することを願っております。

自然科学系(理学部)教授



小林 迪助 KOBAYASHI, Michisuke

「固体イオニクス学会」とともに

本学の大学院修士課程を出ましたのが1968年。それから、他大学の博士課程に進んだあと、私大に就職し、1973年の秋に再び本学に戻ってきました。そして日本が高度成長を遂げた昭和の後半から平成の今日までを本学にお世話になりました。この間、「固体イオニクス学会」の立ち上げ及びその後の運営に協力して来ました。年一回行われる学会名は「固体イオニクス討論会」でして、一件当たり、発表+質疑討論=25分です。これは前身の「固体イオニクス・ガルバニ電池研究会」の頃からの伝統でして、討論することが大切であることを守り続けているためです。年に数回の研究会が組織されます。ヨーロッパ、米国、アジアなどで開かれる固体イオニクス関連の国際会議の日本

南カリフォルニア大学内で親友の同大学教授ブリヤ・バシタ氏と



側窓口にもなっています。出版社はELSEVIERとSpringerが対応してくれて雑誌”Solid State Ionics”と”Ionics”が関連雑誌です。2007年の12月に東工大のすずかけ台キャンパスで固体イオニクスの物理系の国際会議2ndICP-SSIが開かれましたが、国内外から160名余の参加者がありました。この学会には本学大学院出身者の佐久間隆茨城大教授、高橋東之茨城大教授、安仁屋勝熊本大教授、臼杵毅山形大教授、下條冬樹熊本大准教授などなど多くが活躍しています。新潟大学の益々の発展をお祈り申し上げます。

自然科学系(理学部)教授



渡辺 勇一 WATANABE, Yuichi

もう一度歩むであろう、
私の選んだ道

常に業績に追われる科学の世界に身を置いた人生で、同業者とは一度も話し合えなかった事がある。それは、昔から何度も耳にし、最近読んだ「科学者という仕事」という本でも強調されていた戒め、即ち「研究者は研究以外の何事にも入れ込むべきではない」という忠告である。枕元に常にメモを置いていた福井謙一氏、今年のセンター試験に出題された心臓への自律神経の作用を、夢のお告げ(しかも二夜連続!)に従い実験したLoewi氏の例を見ると、創造へのエネルギーは、研究外の営みに無駄に使えば消えてしまうのかも知れない。上の教えを何度も耳にしたのに、私は多大の時間を均衡を外して趣味に費やしたと自覚する。しかし、もう一度科学者をやり直す身と



卒業謝恩会(東映ホテル)の余興で「威風堂々、第一番」(エルガー)演奏

なり、趣味を断ち切って研究への集中を強制されても、多分今の人生と同じ道を辿ると思う。趣味で始めたとはいえ、舞台に立つ機会が頻々に訪れ、内向性の強い私には辛い機会だった。だが、後年この舞台度胸は、授業で学生を統御する精神の面で生かされ、また国際学会発表の表現し難い緊張にも何とか耐える度胸をつけてくれたと言える。何より「arts」の豊かさを知らずして何のための人生かと断言したい。

自然科学系(理学部)教授



山岸 宏光 YAMAGISHI, Hiromitsu

新潟大学での9年間の研究と教育を終えて

本学へ赴任したのは、1999年4月でしたから、退官する2008年3月で丸9年となります。赴任したのは理学部自然環境科学科で、担当は環境地質学でした。教育としては、人間生活と関連のある地表現象を学生が理解できるように、地形解析や空中写真判読技術の習得などに力を入れてきました。研究では、地すべりや崩壊などの斜面災害やそれに関連して中山間地の棚田などの環境変遷の問題についても取り組み、GIS(地理情報システム)を活用した研究を、学生とともに行ってきました。2004年には2大災害が発生して、(社)日本地すべり学会会長として、何度かの調査団長を、また、2006年には新潟大学災害復興科学センター防災部門長を拝命しました。私の研究室では、

山岸研究室の
スタッフや学生



9年間に博士(論文博士3、課程博士1)を4名、修士課程6名(うち3名が中途退学で公務員や教員に就職)、学士課程19名を輩出することができました(写真)。

最後の年の2007年4月には自然科学系附置の環境・防災GISセンターを立ち上げ、2007年11月26日には、本学の国際戦略本部の協力を得て、国際会議「第1回国際GISフォーラムNIIGATA」を開催しました。また、2006年から本センターに「空間情報実習室」を開設して、学生の実習や社会人のための講習に活用されています。本センターが今後新潟大学の東アジアなどに向けた拠点のひとつとなることを期待しています。これまでご協力いただいたみなさん感謝します。

医歯学系(医学部)教授



石原 清 ISHIHARA, Kiyoshi

新潟大学を退任するに当たっての思い

医学部第三内科に11年間、医療技術短期大学部ならびに保健学科に23年間、人生の半分以上を新潟大学とともに歩んできました。本学と私とを結びつけたのはある血清検査でした。東京の病院での卒後研修中、慢性の黄疸と痒みを訴える女性を受け持ち、精査をすすめる中で、ある抗体検査を新潟大学第三内科にお願いすることになりました。患者様の血清と資料を鞆に、特急朱鷺に片道5時間揺られて、冬の日新潟駅に降りました。これが契機となり市田文弘教授に師事し肝臓病を研究することを決心しました。昭和49年から11年間、師市田文弘先生からは研究面だけでなく広く臨床の指導を受け、病気だけでなく病める人を診ることを教わりました。

ミャンマー国際看護
研修に随行して
(マンダレーヒルにて)



その後御縁があり、当時の医療技術短期大学部に赴任することとなりました。浅い教育経験の中で、教壇に立ちましたが、教科書は使用しないこと、スライドは使わないこと、板書を原則とすることは肝に銘じていました。今は板書からプリント中心の講義となっていますが、他は執拗に続けてきました。下手な字での講義に、難しい筆記試験に、冷房のない猛暑の中での授業に耐え、そしてついてきて下さった卒業生ならびに在校生の方々、皆さんと出会ったことを喜びと誇りにしております。そして同僚の先生方、事務の方々、患者様、皆さんからは多くを教わり何度も助けられました。長い間ほんとうにありがとうございました。皆様方ならびに新潟大学の益々の御発展を祈っております。

自然科学系(工学部)教授



丸山 武男 MARUYAMA, Takeo

新潟大学を退任するにあたって

長年お世話になったお礼に、自分の教育経験を書き記します。ここ十年、“如何にして学生を講義(授業)に集中させるか、学ぶことの楽しさを体験させるにはどうすべきか”という命題に対する方策の一つとして、レジュメとQ&A(学生からの質問事項とそれに対する回答をプリントした質問回答集のこと)を組み合わせた講義を行ってきた。2006年度からは、予習レポートを課すことで、半ば強制的に自学自習の習慣を身につけさせることを試みている。2年目の今年、アンケート結果などから推察

するに、予習レポートを課すことが授業の理解度向上に直結することが明らかとなった。

一方、Q&Aを活用したマーケティング(学生の要望・意見・考え方を収集)の結果から、昨今の学生気質も分かってきた。「①点数に極めて過敏、②まじめ、③視野がやや狭い、④やや線が細い、⑤国語力が弱い」という人が多くなってきている。優れた人材として輩出するためには、これからの教育は、専門教育のみならず、人間教育にも力を入れる必要がある。人間教育は、やれば着実に効果が出る。ぜひ、専門教育の中に人間教育を取り入れる工夫をして欲しい。新潟大学の卒業生が社会に出たときに世間からより高い評価を受けられるように…。

おわりに、皆様方のご健勝と新潟大学の益々のご発展をお祈りいたします。皆様の温かいご支援のお陰で、長い間勤務させて戴きありがとうございました。心から謝意を表します。



研究室の合宿研修(2007年9月28日)

自然科学系（工学部）教授



田口 洋治 TAGUCHI, Yoji

化学工場の事故と安全教育

この写真は廃プラスチックから油を精製するプラントのスナップです。化学工学を専攻した人は、一度はこのような大きな複雑なプラントを作りたいと夢見ます。この種のプラントはどんどん大型化され、日本経済を支えています。

この写真のプラントは、不幸なことにかつて火災事故を起こしました。私も事故調査委員の一員として参加し、火災事故の原因究明に当たりました。いろいろ原因が検討されましたが、冷却用ポンプの容量不足という初歩的なミスが最終結論の一つでした。その後ポンプの容量も補強され、今日まで無事故運転が続いています。

このような化学工場のプラント事故は、最近でもセルロースの爆



油化プラント

発事故、メタンガスの発火事故、油爆発事故、煉瓦崩落事故等と続けて報道されています。事故で亡くなった方々もおられ、誠に気の毒なことです。亡くなった方、怪我した方の多くは、何と下請けや孫請けの出向社員です。正社員よりもプラントを熟知していない人々が被災しています。

化学工学を習得した卒業生諸君の大部分は、正社員として入社し、下請けを依頼する立場にたつと思われます。重大な交通事故では、加害者も被害者と同様に大きなダメージを受けます。そのような加害者にならないためにも、その職場に相応しい適切な「安全教育」に全力を尽くして欲しいと思います。元気にご活躍下さい。

自然科学系（工学部）教授



大熊 孝 OKUMA, Takashi

川の自然環境保全の 一つの思い出

私は太平洋岸で育ち、31歳で新潟大学工学部に赴任したが、当初6年間は統合移転前で長岡に住んだ。ここでまず山ウドと日本酒のおいしさに感激し、それ以来日本酒党になった。また、信濃川などにサケが遡上するのを見て、火焰土器に代表される縄文文化の源泉が川にあることを悟った。私の専門は河川工学で、それまでは川を敵視し、コンクリート護岸やダムは当然と考えていたが、それ以後、川の生態系を大切にする河川工学が必要であると考えるようになった。

こうして川の見方が変わると、いろんなことに気付き始めた。まず、越後を流れる川がなぜ「信濃川」なのか疑問になった。その理由は越後に信州からの移住者が多いからという説があるが、それにしても越後人は「お人好し」と思わざるを得なかった。

さらに、信濃川の中流部では東京電力やJR東日本の水力発電所があり、流水をほとんど取水し、信濃川は河原砂漠と化している。また、阿賀野川は尾瀬に至るまで17基のダム群で完全に水力発電のためだけの川に造りかえられている。しかるに、飯山線も磐越西線も電化されていないのである。

このお人好しさは、信濃川の水を関東分水するJAPIC計画に、謙信が信玄に塩を贈った故事にならい、賛成という新聞投稿にも現れていた。この計画に対して、君知事の指示で作られた「関東分水影響調査検討委員会」（委員長・茅原一也、昭和62年設置）に私も委員として参画し、中止することができた。今思い出すと、望外の成功であった。

自然科学系（工学部）教授



小林 敏志 KOBAYASHI, Satoshi

思い出すこと

大学院博士課程を修了した1970年に新潟大学に採用され、当時長岡市にあった工学部に勤務しました。時代はまだ高度成長期。工学部拡張ムードの中で学生と一緒に楽しく過ごしていました。

しかし、工学部の新潟移転が完了した1980年頃から、いろいろ窮屈になってきました。学科新設もあまり認められなくなり、将来計画が求められ、大講座制への移行が促されました。

そんな中で、新しい理念の大学院自然科学研究科に設立当初から参加できたこと、高校生向けに、新感覚のA4版工学部パンフレットを若手教員と一緒に自前で作成したこと、高校生説明会（オープンキャンパスの学部版）を工学部が初めて実施したこと、工学部改組（学科新設など）や大学院自然科学研究科改



2年生合宿研修（1990年4月、下越スポーツセンターにて）

組に関われたこと、大学創立50周年記念事業と工学部創立80周年記念事業のお手伝いができたことなどが、楽しく思い出されます。ただ、学生と一緒に過ごせる時間が年々減ってきたことが残念です。

法人化による大きな変化が起きている今、大学を去ることになりますが、これまで皆様方から頂いたご支援を感謝いたします。併せて、新潟大学の発展と教職員・学生の皆様のご活躍をお祈りいたします。

自然科学系（農学部）教授



荒谷 明日兒 ARAYA, Akihiko

退職にあたって

新潟に来て7年、退職のときが来ました。酒、魚、米と3大好物に恵まれた土地での生活でしたが、夏のフェーン現象の暑さ、冬の曇を伴った大風には今もって馴染めません。

私の研究のフィールドは東南アジアで、赴任するまでは、年に3〜4回出歩いていましたが、赴任後は年1回の出張になりました。この点、現場から遠退いたという不満はありました。しかし、これを補って余りある経験をしたことも事実です。

新潟大学在職7年のうち、学科長の1年を除いて、学務委員を6年（委員長3年）務めました。実業界から来た私にとって、学生との付き合いは新鮮でした。一時期はアパートの部屋が、学



2003年ゼミ旅行

生のたまり場のようなこともありました。新設した学生相談室に來た学生から後日、問題が解決したと報告を受けるのも喜びでした。日常、思ってもみなかったことを考えさせられることもあり、自分の人生経験として得るところが多かったと思っています。

春から神奈川県相模原に帰りますが、これからは「新潟ぶらり旅」の途中で、農学部にも顔を出したいと考えています。

自然科学系（農学部）教授



池田 武 IKEDA, Takeshi

有難かった自由な研究

本学に25年間お世話になりました。

大学院を修了して9年間は地方の旧制大学に籍を置いていました。1講座は、教授、助教授、助手2、技官2の6名で構成されていました。当時は教授が絶大で、技官も年をとっている人ばかりで人間関係にずいぶん悩まされました。

本学に来た時は、教授、助教授、助手でとにかく自由に研究ができ、有難かったです。途中で在外研究員が当たり、アメリカに行く機会を得ました。受入れのE教授は同年齢で、独身ということもあって、当地に行って驚いたことに、土・日曜日も学校に来て仕事をしていました。論文数が多くて、特にトップネームが多くて、どうしてこんなに論文が書けるのかと思った次第です。滞在



修士修了授与式後みんなで…

中に別のB教授を訪ねる機会を得ました。彼は2人の子供がいる一般の家庭の持主でしたが、やはり土曜日に登校して自分の仕事をしているとのことでした。2人の教授とも各々技官が一人付いているのも良い研究体制でうらやましく思いました。こども教官に技官が付いていれば、もっと研究がはかどるのではないのでしょうか。

それにしても、自由に研究ができて本学に来て有難かったです。本学の益々の発展を願いつつ…。

人文社会・教育科学系（大学院現代社会文化研究科）教授



小林 昌二 KOBAYASHI, Shoji

新潟大学を 退任することになったの思い

私は、12年の愛媛大学勤務の後、1986年運よく故郷の新潟大学に着任した。程なく88年に旧笹神村発久遺跡から出土した木簡・墨書土器の調査を皮切りに89、90年の新潟市的場遺跡・旧黒崎町緒立遺跡出土の木簡・墨書土器を、1990年の旧和島村八幡林官衙遺跡出土の画期的な養老年号を伴う「沼垂城」墨書の木簡等の調査研究に出会った。

私の本籍は新潟市沼垂である。これと同じ表記の「沼垂城」墨書は、『日本書紀』大化三年条記載の淳足柵が、沼垂城と表記を変えて存続したことを明らかにした。以後の出土物は『新潟県内出土古代文字資料集成』（2004）として刊行した。

だが、淳足柵・沼垂城はなお不明である。2000年から人文



沼垂城など八幡林官衙遺跡出土木簡をめぐる木簡学会新潟特別研究集会で（1994年9月24日新潟大学）

学部の歴史・地理・考古の先生方や旧積雪地域災害センターの高濱・卜部両先生に全国第一線の城柵研究者も加わった科研基盤Aによる調査チームを率いた。以後も本学プロジェクトや科研基盤Cで探求に邁進した。発見に至らないが着実な成果を上げて満8年に及んだ（『高志の城柵』2005）。

私は、新潟大学のよき計らいや同僚・地元の研究仲間、地元市民、自治体、マスコミ関係者らにも支えられて望外な調査研究に従事できた。この幸いに深く感謝したい。

人文社会・教育科学系（大学院現代社会文化研究科）教授



井上 正志 INOUE, Tadashi

新潟大学を 退任するにあたっての思い

いま振り返れば、恐らく私の人生の、精神的に旺盛な時期の大半は、新潟大学で過ごしたことになります。30歳代のはじめに、昔の教育学部高田分校に赴任して以来、退任を迎える現在まで、30余年を新潟大学に勤務することになりました。

今でも、私の記憶からぬぐい去ることのできない幾つかの得難い経験を、ありありと想起します。

まず、新潟大学に赴任直後に、「教育学部統合」問題に接することになりました。三地区の代議員会に出席する途中で、特急が新津の手前で大雪の中に閉じこめられ（当時まだ新幹線はなかった）、這々の体で家にたどり着いたこと、ドカ雪のた

め宿舎の二階から出入りした経験などは忘れられません。

統合後においては、「教育学研究科」の新設、「教育人間科学部」への改組、旧「現代社会文化研究科」の設置など、どの問題でも、制度疲労をおこした旧来の「教育学部」が新たな学部で脱皮せざるを得ない、悲喜こもごものドラマが繰り返られました。

もはや今となつては、総合大学における教員養成改革が、学部を超えて弛みなく続けられ、世に高い評価を受ける専門的能力を培いうる、新潟大学「教職学部・大学院」の実現が見られるように念願するばかりです。

自然科学系（大学院技術経営研究科）教授



梶田 正美 MASUDA, Masami

新潟大学での12年間

国会が住専問題で紛糾し、自然研改組の概算要求も巻き添えを食って、直前まで着任が決まらぬ波乱含みの平成8年4月に、大学院自然科学研究科に着任した。

それまで24年間、企業で研究開発を担当していた小生は、新職場でカルチャーショックを受けた。企業の求める学生像と学生教育の乖離、仕事の分担や前例ベースのやり方、全く地縁なしの産学連携、お金や設備なしの研究、処遇面でも…と、挙げればきりが無い。しかし直ぐに覚った。このギャップをしっかり認識し、プロエンジニアの目でエンジニアの卵を育て、また効率的な仕事の進め方・考え方を進言することが、小生のミッションであろうと。効果のほどは卒業生の今後の活躍に懸かるが、現在のところ研究室OBで転職者がごく少数なのが救いである。



研究室OB会（2007年6月16日）

最近、社会人教育を主にした大学院技術経営研究科（MOT）創設のチャンスを与えられた。企業の研究所での教育委員長経験の基に、企業人として育てて欲しい方向を提示し、実践力を養成するMOTが平成18年度より立ち上がり、軌道に乗りつつある。我々の願いを体した卒業生が一人でも多く、彼らの職場でイノベーションを起こし、サステイナブルな経済発展に貢献してくれることを願っている。

大学や企業での41年間の研究生活を、周囲の皆さんに助けられ本当に楽しく過ごさせていただいた。ここに御礼を申し上げるとともに、新潟大学のより一層のご発展を念ずる次第である。



青山 清道 AOYAMA, Kiyomichi

新潟大学を退任するにあたり 若者に伝えたいこと

「少年ケニア」の発売日が待ち遠しかった。山川惣治の小説で、アフリカの奥地で象やライオンが躍動する姿、未知の世界への憧れ、冒険に対する熱気にあふれていた。戦後の長岡市で、焼け跡に建てられたバラック校舎の小学校で学んだ私にとって何よりの楽しみだった。中学校ではルイ・エモン著「白き処女地」を愛読した。17世紀に新天地カナダに移住、ケベック地方に定住したフランス農民の物語である。自然の美しさと厳しさが実に生き生きと描かれている。

いつか機会があったら、広大で奥深いアフリカやカナダの自然に触れてみたいという希望をもち続けて勉学に励み、昭和42年、新潟大学工学部に赴任した。

周囲の先生方のご協力をえて、昭和43年から約2年半、JICAの派遣専門家としてナイジェリア連邦共和国、国立ヤバ工科大学の客員講師として、土木工学科の教育や地盤災害調査にあたった。昭和55年から約1年、文部省在外研究員としてカナダ、マギル大学で雪氷工学の研究に従事することができた。



ガーナ医科大学の中庭で野口英世の胸像と（昭和44年）本人は中央

これらの経験を生かし、帰国後は留学生と交わるなかで、多文化共生社会の実現に向け微力を注いできた。“Where there is a will, there is a way”は、私の好きな言葉です。人類の明日を脅かす森林破壊や砂漠化等、環境問題が地球規模で表面化しており、いま日本が求められているのはグローバルな視点からの国際協力です。

“失敗を恐れずに夢に向かって思い切って挑戦してほしい”、学部、大学院時代は多くの試練に立ち向かう大切な準備期間です。

最後に、在職中にご指導、ご支援を賜った教職員、学生の皆様に感謝したいと思います。長い間、ありがとうございました。



ヤバ工科大学で講義（昭和44年）

全学講義開講

学生の総合的な知見を高めるため、学外から講師を招いて行っている全学講義。

平成19年度に行われた「教師の力・教育の力」と「21世紀を生きる学びとは何か」を紹介します。

全学講義:1

「教師の力・教育の力」

● 2007年12月6日（木）16時45分～19時30分 ● 総合教育研究棟G410講義室

● 講師・演題 植村 鞆音（平成19年度日本エッセイスト・クラブ賞受賞）……『「歴史の教師・植村清二」を語る」
長谷川 義明（新潟愛郷会理事長）……『「教育の力、教師の力」
鈴木 光太郎（新潟大学人文学部教授）……『旧制新潟高校教授・黒田亮先生のご業績』

社会的責任と教育効果の向上を目指して授業改善や教育改革の続く中で、ともすると「組織」や「制度」の改革、あるいは「教育技術」の向上に目を奪われがちになってはいないか、と、気付いたのが、この全学講義を企画したきっかけであった。もとより、授業の成果を計算しようという評価体制にあっては、学生が教師に接する中で、何がしかの感化を受け、自らの資質に気付かされたり、教師の姿に言葉では伝えることの出来ない何ものかを感じ取ったりするという、測ることの出来ない「教師の力」は捨象されてしまいがちである。かといって、Face To Faceの場で、教える内容や技術とは別に、学生に知的な触発、あるいは人生を生きるうえでの動機付けがなされるところに「教師の力」を見定めるなら、今日の大学の教員にあっては、そうした力、ある意味では人間性などは忘れられがちであるし、また学生にとっても、教師に接する機会と場がいかに限られているのが現状である。いや、学生と教員との間に人間的な交流を図ることなど難しいというのが、今では実情かもしれない。

しかし、自学自習や映像を通して学生の教育にあたるのではなく、生の人間としての教師が学生の前に自らの姿を晒して何がしかを語ることによって授業を行なう以上、「組織」や「制度」の改革もさることながら、

教員の「人間」としての力も問われることになるのではないか、そのような発想から、この全学講義は企画・立案された。

折りしも、1960年代に本学の文学部部長をお務めにもなった植村清二先生の教師としての生き方を、ご子息の植村鞆音先生が描いた評伝、『歴史の教師 植村清二』（中央公論新社）が刊行され、2007年度の第55回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞された。そこでこれを機会に、今日、忘れられがちな「教師の力・教育の力」について考える機縁に出来ればと考えて、全学講義を実施することを思い立った次第である。



旧制新潟高校正面の映像と鈴木光太郎教授

全学講義：1 ——「教師の力・教育の力」

実施にあたっては、植村頼音先生のお話しを中心に据えるとともに、これとは別に、旧制新潟高校教授で、実験心理学の端緒を開いた黒田亮先生のご業績を発掘した鈴木光太郎・人文学部教授から、植村先生の話に先立って、黒田先生のお仕事の意義をお話していただき、最後に、前新潟市長、その後は新潟大学の監事として大学運営にご尽力下さった、新潟愛郷会理事長の長谷川義明先生から、総括的なお話しを賜るとい

う形で、立体的にテーマを際立たせることが出来るように、と考えた。こうして人文学部附置地域文化連携センターの主催、人文学部の共催で、2007年12月6日(木)の16時45分から19時30分にかけて、市民公開の形で、総合教育研究棟G410教室で「教師の力・教育の力」と題された全学講義が実施された。

鈴木光太郎先生からは、新潟大学の前身の新潟高校でなされた黒田先生の先進的な研究について明らかにされ、大学の知的伝統を実感することができた。植村先生のお話からは、広い視野と深い識見を持ってこそ、些事に「頓着」せずに自らの信じる道を生きることが出来ることを教わった。長谷川先生からは、教師の与える感動は、接した人の生涯に生き続けることを改めて認識させられ、教師の人間としての力の重要性に思いを新たにするのできた全学講義であった。物心両面のご支援を頂いた教務課と、全学講義枠を譲って下さった歯学部に改めて謝意を表する次第であります。



前新潟市長の長谷川義明先生

全学講義：2

「21世紀を生きる学びとは何か」

●2007年12月21日(金) 14時40分～16時10分 ●教育人間科学部大講義室

●講師 佐藤 学 (東京大学大学院教育学研究科教授)

21世紀は教育が社会をリードする時代である。それは、モノの生産と消費が市場の中心であった産業主義社会から、知識・情報・対人サービスが市場の中心となるポスト産業主義社会へ移行し、知識が高度化、複合化、流動化する高度知識社会となるためである。そのため、「基礎的知識・技能・態度」の教育から、「高度の知識を活用する能力」「創造的思考力」

「コミュニケーション能力」すなわち「PISA型学力」の教育への変容が必要となる。

2000年以降に実施された3回のPISA調査(OECD国際学力調査)において、日本の子どもの学力低下は顕著となり、トップレベルから転落したのはなぜか。かつて日本政府は高い志をもって教育に投資したが、現在の教育投資はOECD加

全学講義：2 ——「21世紀を生きる学びとは何か」

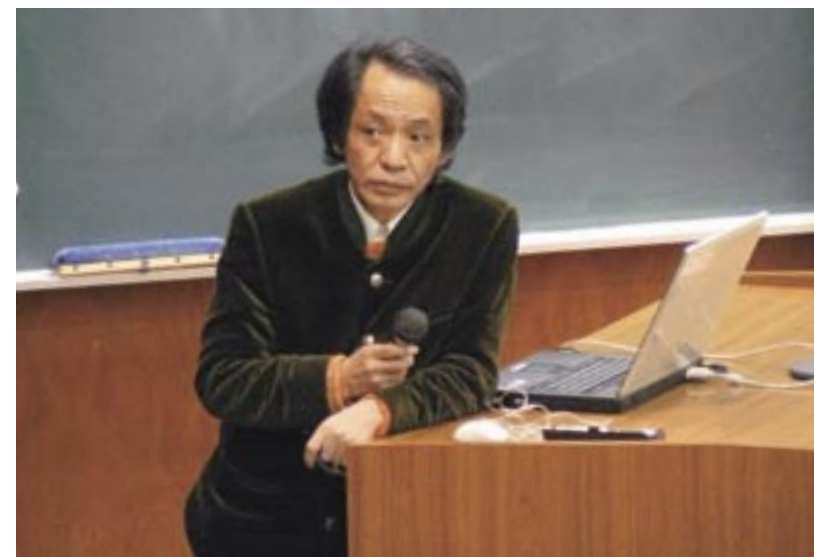
盟30カ国のうち27位に落ち、それとともに教科書の質も教師の質も落ちている。受験と競争の東アジア型教育が破綻し、少数の学ぶことの好きな子と、多数の嫌いな子に分かれ、今や世界で最も勉強しない子どもになってしまっている。6割の子が本を読まないといわれ、多くの子どもにとって学校は挫折する場になっている。「学びからの逃走による学力危機」と言える。

「授業時間の増加」や「関心意欲の回復」は学力低下に対し、全く解決策にならない。授業時間が少ない国ほど学力が高く、関心意欲は経済や社会のあり方に深く関わり、途上国において高い傾向があるのである。21世紀においては単純労働が激減し、専門的知識の市場が拡大するので、仕事を確保するためには何らかの専門家であることがきわめて重要になる。それゆえ、教育の重点が「量」から「質」に変わってゆく必要がある。求められる学力が、「基礎的な知識・技能」から「高次の思考による問題解決」と「コミュニケーション」の能力に変わるからである。ゆとり教育でも基礎学力重視でもなく、受験競争の弊害を除き、「高いレベルの教育をすべての子ども達に」を目標にする必要がある。PISA型学力が1位となったフィ

ンランドは、質と平等を高めることを教育の目標として、29歳までに9割が高等教育を受ける。また、スイスでは、大人として自立する年齢を30歳として、30歳まで教育する。

「勉強」から「学び」への転換が重要である。「勉強」は座学、個人、習得・定着を特徴とするのに対し、「学び」は活動的、協同的、表現と共有を特徴とする。「勉強」は何ものとも出会わないが、「学び」はモノ、他者、自己あるいは文化などさまざまなものとの対話的实践である。「学びの作法」として、3つのC、Care(心砕き、配慮)、Concern(関わり、知的関心)、Connection(繋がり、知識〈意味〉の繋がり)が重要である。聴き合う関係からスタートし、学び合う関係へ発展させる。蟻の目(具体的思考)とトンボの目(複眼的思考、批判的思考)と鳥の目(俯瞰的思考)を統合する。現実、書物、他者、先達から学ぶ。

21世紀は、その社会を生きる人々の知的叡智が問われる時代である。複雑な問題を協同で探求し解決する能力が求められている。自分が「引き受ける問題」を生涯の学びの中軸に据えてほしい。学び続ける限り、希望は生まれてくる。



「勉強」から「学び」へ切り替える必要性を語る佐藤学教授

CAMPUS INFORMATION

第56回 卒業制作展

2007年2月6日～11日 新潟県民会館3階ギャラリーA



大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の修了生と、教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校教育課程美術専修の卒業生による卒業制作展が開催されました。学生生活の中で多様な芸術のあり方を学んできた学生たちの集大成となる作品を展示。多くの方々が来場し、学生たちの作品をじっくり鑑賞していました。

表紙掲載作品

降りしきる日

教育人間科学部 ● 安部英里子 [日本画]

到達できない領域への思いを、目に見えるものに変えられな
いと奮闘した結果。現実感が欲しかった私にとって、スクリー
ントーンは地に足を着けさせてくれる素材でした。

折り姫

教育人間科学部 ● 渡邊友里子 [デザイン]

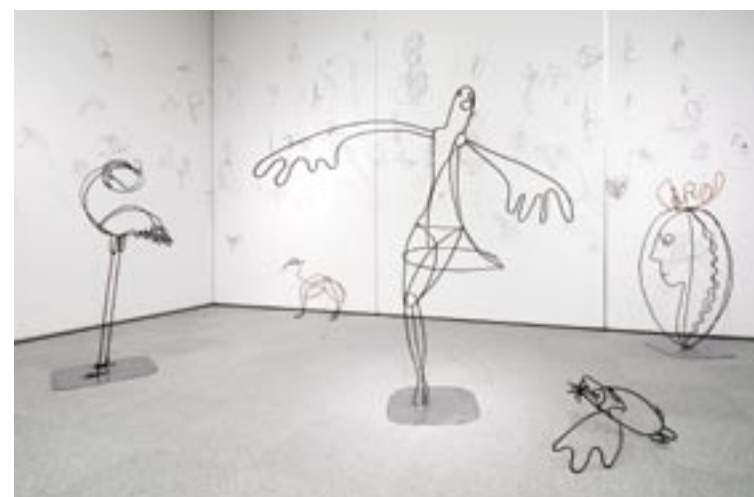
折り紙を折ったような簡単な形状の家具を制作しました。
芯にダンボールを使うことで紙の質感を保ちつつ、折る
際の自由な表現を可能にしました。更にFRPを使いガ
ラス繊維を張り込むことで必要強度を出しました。
生活にとけ込みすぎた為、透明化してしまっている家具
に構造の上での単純な視点を加える。その事によりデ
ザインに目を向けるきっかけになればと考えます。



Icon composed of Geometric Figures Laughter#2 with Wood Tiles

大学院教育学研究科 ● 村井絢子 [デザイン]

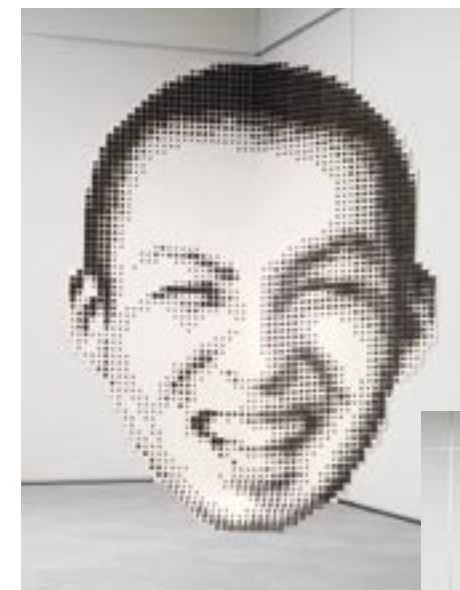
“3次元の支持体に2次元の要素を表出させたい”という発想が起点
となった作品。ある一点から見た時に顔が浮かびあがって見えるよう、
右壁面・左壁面・床面の三面にわたり約2000枚の木のタイルを配
置している。



怒髪天を衝く

大学院教育学研究科 ● 古澤枝里 [彫塑]

タイトルの意味は頭髮の逆立った、ものすごい怒りの形相。
その怒りの表情を木の組み合わせで表現。頭髮は流木による表現。



drawing

教育人間科学部 ● 伊藤 直子 [デザイン]

うれしいも、かなしいも、いたい、も。
イモムシも、サカナも、あのときのあたしも。
吐き出す。
らくがきになる。
みんな、ここにいる。



類型

大学院教育学研究科 ● 杉山佐和子 [洋画]

どれひとつとして同じ形はないが、自然の摂理に従い、共通の性質をもつものをイメージして制作しました。鉛筆を握り、同じように繰り返される私の手の動きにより重ねられた痕跡が、この形を成り立たせています。

卒業制作展



夢で逢いましょう

教育人間科学部 ● 北川麻衣 [日本画]

● 高橋智香 [洋画]

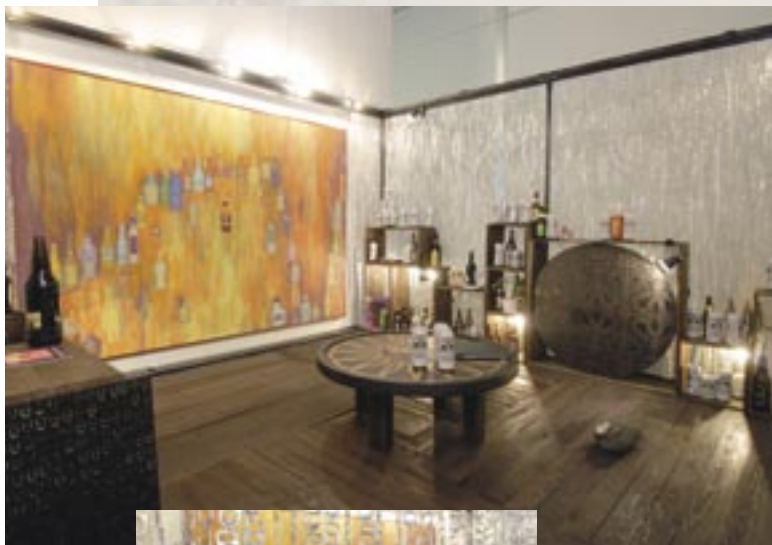
● 長谷川和子 [デザイン]

私たちは、4年間の集大成として『酒』をテーマに共同制作を行いました。50,000個のプルタブに囲まれた部屋の中には、「覗くと様々な絵が見える瓶や缶」「酒の美しい装飾と味に魅せられた日本画」「気分によって天板を取り替えられる円卓」などがあります。

『酒』はあなたにとってどのような存在ですか？

酒は、人を幸せにする飲み物であって欲しい…。

そんな願いを込めて、夢で逢いましょう。



広報委員会第1部会

部会長・編集委員長

石坂妙子 (教育人間科学部)
ishizaka@ed.

委員

田中拓道 (法学部)
takujit@jura.

芳賀健一 (経済学部)
haga@econ.

竹内照雄 (理学部)
takeuchi@math.sc.

柴田 実 (医学部医学科)
mshibata@med.

五十嵐敦子 (歯学部)
atsuko@dent.

加藤大介 (工学部)
dkato@eng.

末吉 邦 (農学部)
sueyoshi@agr.

井村哲郎 (大学院現代社会文化研究科)
imurat@human.

寺尾 仁 (大学院自然科学研究科)
terao@eng.

横山峯介 (脳研究所)
myoko@bri.

田口 洋 (大学院医歯学総合研究科)
yo@dent.

馬淵憲治 (学務部長)
kmab@adm.

事務局 (学務部)

TEL 262-6309 FAX 262-6304

E-mailのアドレスは、
niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。

■新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

新大広報 Back Number http://www.niigata-u.ac.jp/gakugai/pr/c_forum/

新大広報のバックナンバーは上記のURLから見るができます。また、学務部学生支援課で受け取ることもできます。



新潟大学広報誌

Niigata University
Campus Magazine

新大広報

No.167

2008年 早春号

編集・発行／新潟大学広報委員会・新潟大学学務部
印刷／(株)第一印刷所